



〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
文芸OGネットワーク 代表 稲見 和子
発行：2011.9.30

共立女子大学文芸メディア研究室内
Tel/Fax 03-3237-2681
URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei

第9回 文芸サロン講座

こまつ座社長・井上麻矢氏による講演会を開催

6月4日(土) 総会の後、第9回文芸サロン講座が開催された。今回は井上麻矢氏を講師としてお迎えし、「父の残した劇団 こまつ座の仕事」というテーマで講演していただいた。劇芸術研究室で事前に掲示を出して下さったこともあり、学生や外部から聴きに来て下さった方も多く、盛況だった。講演時の様子や感想を会員の小林マサミさんに寄せていただいた。



「父の残した劇団 こまつ座の仕事」について
ご講演中の井上麻矢氏

井上麻矢氏の講演を聴いて 小林マサミ

今は昔、夕闇が迫る頃、家々のテレビから決まって聞こえてくるメロディーがありました。それは「ひよっこり、ひょうたん島」のテーマ曲でした。私とその作者と数々の戯曲、小説、エッセイ、評論を執筆された井上ひさし氏とが同一人物と知ったのは随分、後のことでした。今回、その井上氏の三女で現在、氏の残された「こまつ座」の社長を務められている井上麻矢氏のご講演は、好奇心も交えて大変興味深いものでした。

麻矢氏はフランスに留学され、ご帰国後も演劇とは異なる分野でご活躍ののち、「こまつ座」の仕事に携わられました。最初は劇団の経理部門を任せられ、徐々に「こまつ座」運営の中核となっていかがいます。その過程のエピソードは、ある意味で私家

版「父と暮せば」の世界だったのではないのでしょうか。ひさし氏と、麻矢さんとの父娘の関係は、世間一般のそれとは少し異なり、父への違和感も覚えながら、ある一定の距離を保った関係であったようです。それがお二人で劇空間としての井上作品を、「こまつ座」で構築していく濃密な時間を共有するうちに、微妙な距離は少しずつ縮まり、お互いに認め合い尊敬し合う、絆の強い人間関係になっていかれたのでしょうか。何よりも麻矢さんが井上戯曲の一番の読み手であり、最大の理解者であることは紛れもありません。

ひさし氏は良い演劇とは演者と観客とが一体化し、演出者、役者が観客を心地良く裏切ることで成立すると言っておられたそうです。

麻矢氏はひさし氏が亡くなられた今、もはや新作は望めないが、これからの「こまつ座」の使命は残された数多くの戯曲を上演し、井上戯

曲の「こまつ座」としてのスタンダードな上演スタイルを確立することだと述べられました。そして、その後は、他の劇団に自由な演出形態で、井上戯曲のレパートリーを上演して行って欲しいそうです。

「こまつ座」は3月11日の大震災後の幾多の困難をのり越え、また新たな一歩を踏み出しています。笑い、泣き、感動を呼びさまし、観る者を気持ちよく裏切ってくれる舞台を、これからも大いに期待しましょう。

それにしても生粋の東北人であられた井上ひさし氏のご存命でしたら、この未曾有の大震災をどのように受けとめられたのでしょうか。きっと長い熟考を経た後、東北へのレクイエムと言うべき作品を発表なさったに違いありません。三陸の海に吉理吉理人をのせた「ひょうたん島」がひよっこりと姿を現すのを願って。
(S39 卒)

平成23年度総会が 開催される



●総会・昼食・懇談

11:00~13:15

●文芸サロン講座

13:30~15:30

場所：共立女子大学本館

108号室

出席者：37名

副代表の川瀬治子さんの進行により、滞りなく会は進められた。

1.平成22年度経過報告

①平成22年度活動報告

【会報・資料整理・共立祭・文芸サロン講座・Web ページ各部門から22年度の活動内容を発表】

②平成22年度収支報告

【収支報告・監査報告】

2.第5期役員改選

・改選された新役員のメンバーを紹介

3.今後の活動について

各部門から今年度の活動内容の発表。

・会報「文芸 OG ネットワーク通信」の発行

・劇芸術関連の資料整理

・平成23年度共立祭参加

・文芸サロン講座

・平成23年度予算案

4.共立女子大学文芸学部の近況報告

(3月11日の震災時の大学側の対応、学生の安全確認など)

5.質疑応答

「井上ひさしの劇世界」展 開催される

本館1階ホールの正面奥にはガラスで仕切られた展示スペースがあり、学園が所蔵する品々が常時展示されている。江戸時代の着物、装束、身の回り品から、ヨーロッパの衣装、工芸品にいたるまで、出展される種類と数の多さには目をみはるものがある。このホールで、5月26日から7月4日まで「井上ひさしの劇世界」と銘打たれた演劇資料展が開催された。OGネットワークが整理にかかわっている劇芸術研究室所蔵の資料が主に展示されたのである。

展示室内には、昨春亡くなられた井上ひさし氏（作家、劇作家）の年譜、顔写真、8枚の公演ポスターが掛けられ、その下にさまざまな公演の上演資料が並べられていた。プログラム、チラシ、チケット、劇団結成案内状などが一堂に並べられて

いると、公演当時の熱気がじかに伝わってくるようである。代表作の一つであり、こまつ座結成の旗揚げ公演作であった「頭痛肩こり樋口一葉」コーナーでは、初演時の劇評、再演ごとの出演者の一覧表、作品解説などが付されており、劇作品とその上演をより深く鑑賞する手引きともなっている。

どんなに貴重な資料でも、人の目にふれ、活用されることによってこそ生きてくる。劇芸術研究室の先生方と助手の皆様が準備に力をそそがれたこの展示によって、学生のみならず外部の方々の目にふれたことは嬉しいかぎりである。豊富な資料がいつでも利用、展示されるように、ゆっくりではあるが資料整理を続けていきたい、と考えている。

多田久恵 (S45 院卒)



第1期生の在学当時の世相

政界…吉田、鳩山、石橋、岸と4年間で首相が4人代わる。

TV…昭和28年にNHKテレビ本放送が開始され、街頭での力道山の中継は黒山の人だかりが。

鉄道・道路…地下鉄は銀座線のみ。高速道路はまだなし。

文化…映画「羅生門」（黒澤明監督）がヴェネツィア国際映画祭で金獅子賞を受賞（1951年）。1954年には、カンヌ国際映画祭で「地獄門」がパルムドール賞を受賞。

社会…第1回原水爆禁止世界大会開催（1955年）、陸海空自衛隊発足（1954年）、東海村に日本初の原子力の灯が点る（1957年）。

世界…スターリン死去（1953年）。

連載 私の学生時代——文芸学部で学んだ日々

文芸学部創設から半世紀余り。時代の変遷とともに大学も変革を重ね、学生生活も様変わりした。私たちは文芸学部でそれぞれの青春時代をどのように過ごしてきたのだろうか。当時のことを学生の視点で振り返り、記述することは、思い出の積み重ねにとどまらず、今の学生たちやこれからの卒業生たちへつながるメッセージにもなると考えている。

第1回目は、1期生の江川優香里さん（芸術学専攻）に創設時の学生生活の様子を当時の世相とともに綴っていただいた。

昭和28年4月、 文芸学部がスタート

戦後、10年も経たない昭和28年春、「文学と芸術の広範囲な教養を身につけ、社会で活躍出来る女性の育成を」という構想のもと、文芸学部（文学と芸術学の2専攻）は誕生した。その1期生として入学した私たちの学生生活がどのような日々であったか、60年前に思いを馳せてみる。「創設当時は、文学と芸術の2専攻だった」と、『文芸学部50年誌』に記されている。もっとも文学は国文学と英文学に分けられており、教授陣は福原麟太郎先生、岡崎義恵先生、菅原太郎先生…。4年間での履修単位は124ではなかったかと記憶している。1年、2年次は文学専攻も芸術学専攻も一般教養科目が必修で、一緒に講義を受けていた。もちろん余裕があれば専門科目も修得できた。

学園外

【通学路】

国電と都電を使って通学する人が大半で、国電はお茶の水、水道橋、神田駅下車。都電は神保町、専修大学前で下車。当時、都電は都内40系統もあり、重要なアシだった。

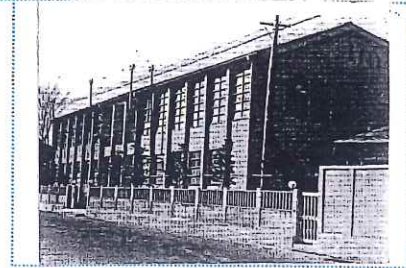
【学園界限】

三省堂を筆頭に本屋街、リーダーズダイジェストの庭、餃子の店「おけい」、ラーメン「五十番」、食堂「綿徳」、喫茶店「らんぶる」、洋菓子「柏水堂」、中華料理「揚子江」が人気店だった。

創設当時の学内の様子

【入学式】昭和28年4月 於共立講堂

- ・学長 鳩山薫先生
- ・初代文芸学部長 新関良三先生（教授）
- ・授業 担任 遠藤慎吾先生（教授）、
副担任 増山暁子先生（助手）
（1期生の学年担任・副担任）



文芸学部創設時の校舎
『文芸学部50年誌』より

【全学集会】

定期的に共立講堂に全学生、先生方が集い、鳩山学長、文化人の方々の講演を拝聴。特に心に残っているのは、鳩山薫先生の「誠心誠意」というお言葉。

【学び舎（現在の3号館）】

当時は木造3階建てで、歩くたびに床がガタガタと鳴り、その足音が懐かしい。正面玄関を入るとすぐに事務室があり、そこに常駐されていたのが文学青年の中川先生だった。2階の踊り場には大きな柱時計があり、左側は短大文科と別科。冬は自分達で石炭を運び、ダルマストーブで暖をとり、夏は窓を開けて自然の涼を。

【その他】

部活動は家政学部と共通で、新聞部、放送研究会は1期生である私たちが立ちあげた。また当時、地方からの入学者は寮生活を送っており、文芸の学生は杉並寮を使用していた。

昭和32年3月、 文芸学部1期生112名卒業

新関良三学部長のおことば

門は大きく開かれた
最初の門出である
はるかにつづく行路には 幸福と苦難とが錯交しているであろう
今ここに面影を残して 学窓を巣立する人たちの
よく苦難に耐えて 幸多からんことを心から祈念しつ

「1期生卒業アルバム」より

新関先生はじめ著名な先生方に薫陶を頂いて卒業した私たちは、まことに贅沢な4年間を送ることができた。“ガタガタ校舎”と共に文芸学部の古き良き時代の思いが語れる「いっき会」（同期会）をこれからも大事にしたいと思っている。
江川優香里(S32卒)

東日本大震災の

大学への影響について

3月11日の震災発生時、大学は卒業式を間近に控えた時期で、すでに後期授業と試験は終了していましたが、学生と教職員、その他居合わせた人達を含め五百数十名が3号館と本館に宿泊することになりました。大学の対応については、適切であったとの評価が多いようですが、首都圏で大地震が起きた場合を考えると、昼間人口の多い千代田区の大学としては、外部者への校舎の開放という新たな課題に直面することになったと思います。

震災の影響で年度末から新年度開始期にかけてのスケジュールは、大幅な変更を迫られることになりました。文芸学部では、13日のEQIQ入試(AO入試)を予定通り実施しましたが、15日に予定され

ていた卒業式は急遽延期、卒業祝賀パーティーの類も、学生自身の判断により中止になりました。多くの大学がそうだったように、新年度の始まりもすべて異例で、入学式は16日に延期、前期授業は約2週間遅れて25日開始となりました。

延期になった卒業記念式典は、5月29日に共立講堂で執り行われました。当初の予想を大幅に超える卒業生の約7割が参加、友達や教員と卒業の喜びを分かち合う姿がみられました。翌日の朝日新聞に写真入りで報道されたのをご覧になった方も多いと思います。

震災は学生の就職にも影を落としており、一体どれだけの影響があるのか計り知れないものがあります。大学としては、これからも引き続き対応を迫られることになるのではないのでしょうか。

下村陽子 (S46 卒)

被災された皆様に

お見舞い申し上げます

3月11日に発生した東日本大震災に際しまして、亡くなられました方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された大勢の皆様によりお見舞い申し上げます。会員の皆様のご家族、ご親戚、ご友人等にも、被災された方がいらっしゃるかもしれません。

微弱な力では為す術もない未曾有の災害でしたが、被災地の皆様におかれましては、一日も早い復興と、痛手の回復をお祈りいたします。

文芸OGネットワーク代表

稲見和子



劇芸術資料室から

一流の力

川瀬治子

現在、歌舞伎座は建て替え中とあってその姿はない。今と同じく歌舞伎座が空襲で焼失し、その存在がなかった昭和20年10月、帝劇で六代目の「鏡獅子」が掛かった。六代目といえば歌舞伎好きならすぐにわかる、六世尾上菊五郎のことである。

昭和24年に亡くなったのでこれが最後の「鏡獅子」となった。なぜ突然六代目?かという、この時歌舞伎に全く無関心であった私の母が勤め先の観劇会(昔は旅行、食事と職場で音頭を取っていた)で見に行き、他の役者、演目

は全く記憶にないのに、六代目の舞台だけは未だにハッキリ思い出せるというのだ。戦後初の出演でしかも自身が埋もれていた演目を復活させ、育て上げ、生涯の当り役といわれたものだけに、その熱の入れ方は充分想像できる。興味のない者の目を開くには最初が肝心と私は母の話から確信した。古典だからといって型通り演じては退屈な舞台もある。歌舞伎だけでなく他の芸術も全て最初に一流のものと接すること、深くは理解できないまでもかなりの核心まで感じ取ることができるとは間違いない。それにしても繰り返すが私も六代目を直に見たかった!! (S52 卒)

掲 示 板

「共立祭」は10月15日(土)、16日(日)に開催されます。今年のテーマは「Re」。震災で被害を受けた方々の手助けになるように、復興、再生などの英語のこぼから取ったものだそうです。OGネットの会場は、本館407号室です。ぜひお越しください。

編集後記

今、あらためて時代を振り返り、人々のつながり確かめる時期にきているような気がしています。是非ご意見をお寄せください。(E)